広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

日本人ならではの豊かな感性を新しい象嵌技法で表現

上野　浩平　熊本県／陶芸家

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠（たくみ）」を応援する。

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手掛け、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第1回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52人の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか？」「地域のオリジナリティーはあるか？」「コンセプトやターゲットは明確か？」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約1年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足掛かり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の一つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。熊本県選出の匠、陶芸家・上野浩平さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

1月18日、プレゼンテーションにて

エリア・コンサルティングでの一コマ

スーパーバイザー
小山　薫堂氏

1964年6月23日、熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

表裏違う表情持つ「二面性」のある器

厳しいと思っていた人が、実は優しかったり、強いと思っていた人に弱い部分があったり…。人の意外なギャップ（二面性）に遭遇した時、以前よりも心引かれ、強く印象に残ることがある。

ここに、華やかな洋食やサラダなどが映えそうなグレーの大皿が1枚ある。くるりと裏返すと、一瞬で漆黒の大皿へと早変わり。同じ器だが、もはやそれはグレーの大皿とは別物のように見え、目の前にあったものが瞬時に変化するという「二面性」に出合うことになる。

400年以上の歴史を持つ「八代焼　上野（あがの）窯」の13代目・上野さんが今回のプロジェクトでつくった「HINEMOSU（ひねもす）」は、この二面性を器で表現した斬新なものだ。

器の両面どちらも表として使える「両面（ふたおもて）」のフォルムで、表裏それぞれの使い方を楽しむことができる。

こうした新鮮な驚きと遊び心の追求は、茶道の世界などでは至極当たり前とされてきた。上野窯の開祖・尊楷（そんかい）が、千利休のまな弟子だった細川三斎（忠興）に仕えていたことから、作品は現在も茶陶の作風を色濃く残す。なじみ深い茶道のもてなしにヒントを得て、二面性というキーワードが生まれたという。

この器には、形だけでなく、「面ごとに表情を一変させる」という驚きも隠されている。

青磁象嵌（ぞうがん）の青磁の色は、地元・八代で採れる白・黒2種類の土をブレンドすることで生まれる。本来の青磁象嵌ははっきりとした具象文様を得意とするが、「HINEMOSU」は、色の要となる土の調合を段階的に変えて埋め込むことで、白から黒のグラデーションを象嵌で表すことに成功。「朧（おぼろ）象嵌」と名付けられた上野さん独自の技法が、それを可能にした。

作品をプレゼンテーションする上野さん

バイヤーと商談中の上野さん

上野さんが手掛けたプロダクト「HINEMOSU（ひねもす）」

「形のないものを彫り込む」

上野窯は八代市日奈久町の静かな温泉街にある。開窯は1602年。古くは、肥後細川藩の御用窯を務めていた歴史ある窯元だ。八代焼の青磁象嵌は一子相伝でのみ守り継がれている。13代目となる上野さんは、東京や京都での修業を経て帰郷し、12代目の父・浩之さんに師事。現在も親子で器作りに励んでいる。

「八代焼は、一般的には工芸品や美術品というイメージが強い。日常から遠いところにある伝統工芸をどこまで普段使いの器として完成させられるかが今回の課題でした」と上野さん。エリア・コンサルティングの際もサポートメンバーの下川氏から、コンセプトは良いが、サイズ展開や手になじむ持ちやすさかどうか、洋食器としての使いやすさはどうかなどについて、具体的な改善点をアドバイスされた。

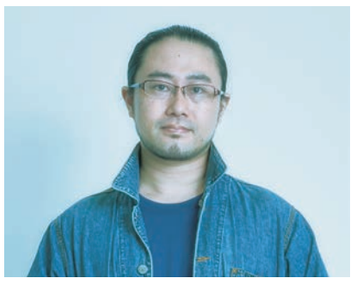
プレゼンテーション本番の直前には、熊本在住のイタリア料理のシェフに、器からインスピレーションした料理を作って盛りつけてもらう〝実験〟を敢行。実際にプロに使ってもらうことで、器としての使いづらさや持ちづらさが浮き彫りに。それらを受けて、性能よりコンセプト重視になっていたことを実感したという。あらためて、手になじむ、料理を盛りつけやすいなどの機能性を強化することで、新しい感覚の洋食器に挑むことを決意。課題を自分なりに解決した上でプレゼンに臨んだという。

今回のプロジェクトを通して、上野さんはあらためて日本人のアイデンティティーを感じている。新技法の朧象嵌は、時間の経過や光の移ろいなど、いわゆる「形のないものを彫り込む」という表現法。美しく変化していく四季の中で、空模様に名前を与え、はかない一瞬を大切にめでる。そんな日本人ならではの繊細な感覚を、陶芸家として、これまでにないアプローチで表すことに成功したからだ。

しかし、プロといえども象眼で色のグラデーションを表現するのは至難の業。また、陶器は焼くと縮まり、土の収縮率はそれぞれ違うため、割れたり、色の境目が不自然になったりしてしまう。そのため、土の乾かし方や管理方法を工夫。試行錯誤を重ね、美しい器を完成させた。

昨年の熊本地震により、焼き物は一瞬にして「割れもの」になった。そんな時、陶芸家として苦悩しながらも、熊本のために何かできることはないかと思い立ち、今回のプロジェクトへの参加を決めたという。上野さんは「製品化するにはまだ時間がかかりますが、時間をかけて、もっと良いものを完成させたい」と笑顔で語った。

作陶活動の拠点、八代市日奈久町の風景


上野（あがの）浩平
熊本県／陶芸家

1978年熊本県八代市生まれ。東京藝術大学美術学部工芸科彫金専攻、京都市伝統産業技術者研修陶磁器コースを経て帰郷。半乾きの素地に彫り込んだ凹部に白土を埋め込み精緻な文様を表現する「青磁象嵌」の技法を代々受け継ぐ「八代焼　上野窯（やつしろやき・あがのがま）」で父・浩之氏に師事。配合を変えた土を階調ごとに象嵌し、濃淡を出す「朧（おぼろ）象嵌」など独自の技法にも取り組む。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT